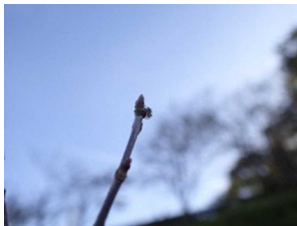


旅立ち

1. バルーニング

植物が風を利用して種子を散布することはよく知られていますが、動物が分布を広げるために風を利用していることはあまり知られていません。風に乗って空を飛ぶことをバルーニングと呼んでいます。

ハダニ(植物の葉から吸汁するダニ類)でも知られているようですが、有名なのはクモです。多くのクモは、卵塊を糸で覆い、卵囊と呼ばれるものを作ります。孵化した子グモは、しばらく集団で過ごします。これをまどい(円居)といいます。やがて分散していきます。この時、糸を利用して飛ぶのです。網を張る時も、風に流した糸が付着した場所を利用して枠を作っていくのですが、子グモは流した糸が風に乗った時、掴まっている脚を放すと空に舞い上がるのです。



風を待つ子グモ

遠くまで行くために、場所は樹間ではなく開

けた草はら、時は風の強い晴天が選ばれます。時期的には、秋に孵化して幼体で越冬する種、春に孵化する種がありますので、晩秋か初夏となります。

飛行機や大洋を航海中の船でも捕捉できるということですが、家周りにいつのまにかやって来ているという体験は、この移動能力のせいです。条件が整うと一斉に飛び始めますので、東北地方では秋は「雪迎え」、春は「雪送り」といわれています。悪天候でも歩いてみると、新しい発見があります。



孵化した子グモ



まどい(円居)

2. ベニバナボロギク

キク科でボロがつくものは、ノ(野)-ボロギク、ダンド(段戸)-ボロギクと3種あります。種子に付く綿毛が長く、襤褸(ぼろ)を思わせるのですが、その長い綿毛のおかげで世界中に分布を広げた種となっています。

なかでもベニバナボロギクは空き地ができると、すぐやってくる先駆植物です。山火事の跡地にすぐ出現する種として有名で、山間部でも裸地ができると群落を作ります。大量の種子がどこでも散布されていると考



ベニバナボロギク

えなくては説明がつかない現象です。1年生植物で、生育も早く太くみずみずしい茎や柔らかい葉を持ち、数十cmもの高さになって、たくさんの花をつけます。朱色で下向きの頭花は他2種より目立ちます。戦時中は「南洋春菊」と呼んで、食用にしたそうです。生の時はかすかに春菊の香りがしますが、加熱すると消えてしまいます。



綿毛

施肥しない焼け畑農業が成立するように、焼け跡には肥料分がたくさんできています。また、林間の裸地には腐植土と強い光が供給されます。ベニバナボロギクは、これらを利用して世界を渡り歩く戦略と考えられます。1・2年後、他の植物が生育を始めると姿が見られなくなってしまうパイオニアです。

打吹山でも突然現れ、また消えて行く旅人で、一期一会の植物といえるでしょう。